

令和 4 年 6 月 3 日現在

機関番号：32614

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00061

研究課題名(和文)江戸期『論語』訓蒙書の基礎的研究

研究課題名(英文)Basic Research on Beginner's Textbooks of Lunyu in the Edo Period"

研究代表者

青木 洋司 (AOKI, YOJI)

國學院大學・文学部・准教授

研究者番号：50780160

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：江戸期に多く作成され、初学者を始めとする幅広い読者層に向けた著作である『論語』の訓蒙書を研究し、以下の成果を得た。第1は、江戸期の『論語』訓蒙書171点を掲載した「研究対象文献目録稿」の作成である。第2は、現存する『論語』訓蒙書のうち、22点について、対象読者層、重要学説などの特徴を明確にした解題の作成である。第3は、『論語』訓蒙書に関する12の論考である。これらに関連する諸成果を加えて、『江戸期『論語』訓蒙書の基礎的研究』(明德出版社、2021)を公刊した。また、webサイト「江戸期『論語』訓蒙書の研究」(<http://kunmou.info/>)を作成し、4点の訓蒙書を公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、江戸期の『論語』訓蒙書は言及こそされていたが、研究されることは少なかった。本研究では、「研究対象文献目録稿」によって訓蒙書の書目を確定することができた。加えて、代表的な訓蒙書には解題・論考を作成することにより、対象読者層、重要学説を明らかにした。その結果、訓蒙書は「初学者向け」の書物群とされることが多かったが、初学者だけではなく、篤学者や講義を試みる層を対象とすることを、訓蒙書の分類としては、これまで知られていた独学・自習参考書の他にも、普及注釈書、工具書などが存在することを、それぞれ明らかにした。

研究成果の概要(英文)：We researched beginner's textbooks of Lunyu, which were written in abundance in the Edo period for a wide range of readers as well as beginners, and consequently produced 1) "Kenkyu Taisyo Bunken Mokuroku Ko" (Index of Research Literature) comprising 171 kunmosho of Lunyu in the Edo period; 2) an annotated bibliography that specifically explains the characteristics (e.g. target readers, important theories) of 22 existing kunmosho of Lunyu; and 3) 12 articles on kunmosho of Lunyu. Also, we published "Edo-ki Rongo kunmosho no kisoteki kenkyu" (Basic Research on Beginner's Textbooks of Lunyu; Tokyo, Meitoku Shuppansha, 2021) including accomplishments in relation to the above mentioned 3 research achievements. On top of it, we created a website "Edo-ki Rongo kunmosho no kenkyu" (Research on kunmosho of Lunyu in the Edo period; see <http://kunmou.info/>, where 4 kunmosho are available to the public.

研究分野：中国哲学

キーワード：論語 四書 訓蒙 国字解 師説 朱子学 江戸漢学 諺解

1. 研究開始当初の背景

『論語』が東アジア全体に与えた影響は非常に大きい。現在でも、中国や韓国、我が国では、『論語』に関する研究が盛んに行われている。しかし、これまでの『論語』の研究には重要でありながらも空白の箇所が存在する。それが本研究で取り扱った「訓蒙書」と称される一連の書物群である。

江戸期では、『論語』の需要は爆発的に高まり、様々な注釈書や解説書などが作成された。その中で訓蒙書も作成されている。訓蒙書は中国や韓国にも存在するが少数に留まり、重視された形跡もない。一方、江戸期では、漢文割り注の形式の一般的な注釈書とは異なり、漢字仮名交じり、和文、図入りの形式を取り、「示蒙」「幼学」「初学」「俗解」「諺解」「通俗」「國字解」などを書名に冠する訓蒙書が大量に作成された。

江戸期に作成された訓蒙書は、中国や韓国とは、大きく異なる性格を持つ。従って、日本のみならず、東アジアにおける『論語』需要や、その普及の異同という大きな問題にも展開する。さらには地域性とも密接に関連する。各地方や各藩校で、読者の多かった訓蒙書を解明することにより、各地方や各藩において重視されていた学術も明確になるだろう。つまり、江戸期の『論語』訓蒙書を検討することは、学術史のみならず、教育史の視点としても重要である。そのため、本研究に取り組んだ。

2. 研究の目的

本研究は、単に研究の進んでいない江戸期の『論語』訓蒙書の検討を目的とはしなかった。また、著名な『論語』注釈書を分析することで、江戸期の『論語』解釈を検討するものでもない。上記のように、江戸期において時期、場所を問わず、需要の高かった訓蒙書を検討することで、当該時代の学術史の一端を明らかにすることを目指した。

訓蒙書の実態の解明は、新たな研究の視点のみには止まらない。本研究の進展によって、文学、教育史、書誌学などの人文科学分野との連携も可能となる。本研究の成果は、学際的な研究の基礎として、多方面に寄与することができよう。

3. 研究の方法

江戸期において、中村惕齋、山崎闇斎、荻生徂徠などの学派は、それぞれ『論語』に関する訓蒙書を作成した。もちろん上記以外の学派も訓蒙書を作成しており、その解釈は、各学派によって大きく異なる。この点に着目し、各種の訓蒙書が、どのような学派の解釈に依拠していたのか。また、どのような層を対象としていたのかなどに注目し、研究を行った。これは、各学派の学術が、いつ、どこで、どのように展開したのか、その広がりが明確にするためであり、この視点は、『論語』訓蒙書のみならず、江戸期の学術を解明する上で極めて有益であろう。

4. 研究成果

本研究の主たる成果は以下である。

(1) 江戸期『論語』訓蒙書の目録「研究対象文献目録稿」の作成。

『論語』訓蒙書は言及こそされているが、書目は確定しておらず、解釈も明らかではない。そこで、各種の漢籍目録、ベータベースなどを使用した悉皆調査を行い、江戸期に作成された『論語』訓蒙書の書目を確定させ、目録を作成した。その結果、「研究対象文献目録稿」には、171点の訓蒙書を掲載することができた。同目録稿は、今後の研究基盤となり得るものである。

(2) 江戸期『論語』訓蒙書の解題、及び、論考の作成。

本研究では、現存する訓蒙書に関しては、可能な限り、閲覧、あるいは入手に努めた。これらを用いて、代表的な訓蒙書である溪百年『論語餘師』、毛利貞齋『重改論語集註俚諺鈔』を始めとする22点の訓蒙書の解題を作成した。解題には、作成目的、対象読者層、体例、特徴的な学説などを明記した。代表的な訓蒙書のみならず、これまで知られていなかった訓蒙書の解題も作成しており、今後の研究に裨益するところも大きい。また解題の作成とともに、12の論考を作成した。

上記(1)(2)を通して、江戸期『論語』訓蒙書の解釈、学派、普及状況などの一端が明らかとなった。これらに「江戸期『論語』訓蒙書年表稿並解説 天正十一年から元禄元年」や「研究対象文献先行研究(単行本の部)」「同(雑誌論文の部)」などの関連する諸成果を加えて、『江戸期『論語』訓蒙書の基礎的研究』(明德出版社、2021)を公刊した。

この他、webサイト「江戸期『論語』訓蒙書の研究」(<http://kunmou.info/>)を作成し、『四書國字辨』『論語序説諺解』『論語餘師』『通俗四書註者考』の4点の訓蒙書を公開することができた。

なお、訓蒙書は『論語』のみに作成されていたのではなく、様々な分野において、作成されている。本研究は『論語』に焦点を置いたが、今後も関連する分野を含めて、その広がりが見込めるであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 青木洋司	4. 巻 66
2. 論文標題 漢百年『論語余師』再考 - 『論語集注』との関係を中心として-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 國學院中國學會報	6. 最初と最後の頁 107-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大貫大樹	4. 巻 66
2. 論文標題 浅見綱斎『論語師説』と（糸+遣）縷惻怛一わが国に於ける『論語実践』-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 國學院中國學會報	6. 最初と最後の頁 86-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 青木洋司	4. 巻 60
2. 論文標題 和田静観窩『論語序説諺解』小考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『國學院中國學會報』	6. 最初と最後の頁 90-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 青木洋司	4. 巻 4
2. 論文標題 毛利貞齋『重改論語集註俚諺鈔』について 引用諸註を中心として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本儒教学会報	6. 最初と最後の頁 93-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石本道明	4. 巻 69
2. 論文標題 中村惕齋『論語示蒙句解』小考ー学問は人格の陶冶のためにー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 新しい漢字漢文教育	6. 最初と最後の頁 17-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 大貫大樹
2. 発表標題 浅見綱齋『論語師説』について 日本に於ける『論語』実践
3. 学会等名 國學院中國學會第63回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 青木洋司
2. 発表標題 和田静観窩『論語序説諺解』小考
3. 学会等名 國學院大學中國學會 第217回例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青木洋司
2. 発表標題 毛利貞齋『論語集註俚諺鈔』について 明代學術との関係を中心として
3. 学会等名 日本儒教學會 2019年度大會
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石本道明
2. 発表標題 中村惕齋『論語示蒙句解』－江戸期論語訓蒙書の研究－
3. 学会等名 第35回全国漢文教育学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大貫大樹
2. 発表標題 江戸期『論語』訓蒙書の変遷 - 天正年間から元禄年間を中心に -
3. 学会等名 令和元年度東洋文化談話会発表大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柴崎一孝
2. 発表標題 江戸期『論語』訓蒙書の研究 - 中根鳳河『論語徴渙』を端緒に -
3. 学会等名 第6回南開大学國學院大學大学院生若手研究者学術フォーラム東アジア研究国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 西岡 和彦、石本 道明、青木 洋司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明德出版社	5. 総ページ数 420
3. 書名 江戸期『論語』訓蒙書の基礎的研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

webサイト「江戸期『論語』訓蒙書の研究」(<http://kunmou.info/>)

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石本 道明 (Ishimoto Michiaki) (20212938)	國學院大學・文学部・教授 (32614)	
研究分担者	西岡 和彦 (Nishioka Kazuhiko) (80348870)	國學院大學・神道文化学部・教授 (32614)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------